

新たな情報提供の試み

予測技術、情報発信の進化が 確かな防災を実現する

防災において重要なことの1つは、住民に正確かつ迅速に情報を伝えることである。そのためには平常時から画像などを駆使した、わかりやすい情報を発信するとともに、予測技術を発達させる必要がある。そのための施策や課題などについて、現在の取り組み状況をみている。

短時間降雨量 予測技術の開発促進

国土交通省は現在、全国26箇所にレーダー雨量計を設置し、雨の強度、雨の領域の移動などをリアルタイムに把握、画像化するとともに、洪水予測モデルのデータとして活用を図っている。避難や防災に役立てるため、今後は20分から1時間以内くらいの短い間隔で、雨量や強い雨の領域がどこへ移動していくかを予測する技術のさらなる発達を目指している。

氾濫水の 洪水予報の実施

洪水を予測する場合、雨の降り始めからの実績雨量、現時点での実績水位などによって、今後の河川内の流量や水位の予測をしている。今後の課題として、避難時に重要な氾濫水による浸水の範囲や水深の予測について、研究・開発している。

地下空間への 氾濫水の流入予測

近年、都市の地下街やビルの地下室が激しい豪雨によって浸水する被害が増えている。そこで国土交通省は、地下空間の浸水対策のガイドラインを設けた。氾濫水に対して事前に必要な措置を可能にするためには、氾濫水が地下に対してどういう危険性を持っているかを予測することが大事である。



博多の地下街に流れ込む濁流
(平成15年7月)〔写真提供 / 毎日新聞社〕

中小河川における水位情報の周知

水防法が改正され、主要な中小河川に避難等の参考となる「特別警戒水位」が新たに設定された。

